

夜明けへの挑戦

豊田喜一郎伝

木本正次

HOYTAL



夜明けへの挑戦

豊田喜一郎伝

木本正次



新潮社

夜明けへの挑戦 よあ ちようせん

昭和五十四年七月五日印刷

昭和五十四年七月一日発行

著者 木本正次 きもとしょうじ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (業務部) 03-26615111

(編集部) 03-26615411

振替東京四一八〇八

印刷 株式会社金羊社

製本 大口製本株式会社

定価 八八〇円



© 1979, Shoji Kimoto
Printed in Japan

(乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

夜明けへの挑戦

豊田喜一郎伝

藪と脱出

「なんや喜一郎、こんなところにおったのか」

襖をあけて、表口の八畳の間からこの十畳の間にはいつて来た中年の男が、胡坐をかいてテーブルに頬杖ついている男を見下ろして、顔をしかめた。

「またそんなもん描いとったのか。何も親父の法事で郷里に来てまで、機械の設計せんならんこと、ないやないか」

男は、小言めかしく言った。当時の日本人としては、いぶん背が高く、五尺七、八寸（一七五、六センチ）もあろうか、贅肉のない縮まった身体つきで、背筋がしゃんと伸びている。モーニングに威儀を正して、高いカラーの下、の黒っぽいネクタイは、一分の弛みもなく締められている。

「……………」

呼びかけられた男は、答えなかった。見上げようとしなかった。そんな声なんか聞こえもしないといった風情で、テーブルに屈み込んで大判のノートに鉛筆で、何か機械の

一部のような図形を描いている。

その十畳の日本間は、全くがらんと広がった。田舎の旧家なので、現代の都会の家とは違つて畳がずいぶん大きい。しかもその広い部屋に飾り付けなどは何一つなく、真ん中にぼつんと、朱塗りの大きな円テーブルが置かれているだけだから、一そう広々と、けれども殺風景に感ぜられた。

テーブルに凭つて図形を描いている男は、立っている男よりは十歳ほど若いようであつた。同じようにモーニング姿だが、上着は横に脱ぎ捨ててある。チョッキもワイシャツも、上のボタンは二つ三つはずして、ネクタイはだらしなくずり下げられている。ワイシャツの左の袖を肘までたくし上げて頬杖をつき、大きな座布団にぎたなく胡坐をかいてゐる。呼びかけた男とは対照的な、無造作な姿であつた。

「法事も無事に終つたし、わしはぼつぼつ名古屋へ帰ろうかと思ふんやが——どうや喜一郎、お前らもししよに帰らんか」

氣を取り直したように、男は見下ろしたま言つた。

「うん」と氣のない声が唇から漏れただけで、スケッチに耽っている男は顔を動かさずともしなかった。

昭和六年の十一月初旬の或る午後。

いまにも降り出しそうに、空が重苦しく曇っていた。浜

名湖から三キロほど西によった、静岡県浜名郡鷺津町（現・湖西市）の、字山口（あざやまぐち）という鄙びた農村の山すそにある豊田旧宅の一室であつた。

動力織機に数々の改良や発明を重ね、最終的には日本では最初の、世界でも当時、最優秀といわれた自動織機を完成して、『発明王』の名の高かつた豊田佐吉が、前年の十月三十日に数え年六十四歳で名古屋覚王山の別邸で世を去つてゐる。

その葬儀は、五日後の十一月四日に、かつて佐吉自身の寄金によつて建設された名古屋市中区新栄町の教化会館で行なわれ、会葬者が三千人を数える盛儀であつた。そしてそれから満一年を経て、この十月三十日には東区長堀町の豊田家の本宅で一年忌法要が行なわれ、引続いて覚王山に竣工した豊田家墓地で納骨式が行なわれた。さらに、豊田家の宗旨は顕本法華宗なので、佐吉の分骨は総本山である京都寺町の妙満寺と、郷里である鷺津町の妙立寺（みょうりゅうじ）正住院の二カ所に納められることになり、そしてさきほど、その郷里での法要が終つたところであつた。

法要は内輪のものであつたが、それでも親戚や郷里での知人、縁者や、また豊田紡織や豊田自動織機製作所の幹部などが列席して、賑やかであつた。それらの人々の多くは、正住院での法要が終るといったん豊田旧宅に挨拶に寄つた

が、それもさきほど、みな帰つて行つた。残っているのは家族とごく近い二、三の親戚だけで、屋敷は静まり返つてゐた。

「おい、どうする？」

と、立っている男は気短かそうに返事を促した。

「俺は二、三日——ここに残る」

ぼそつと、図形に取組んでいる男は、相変らず氣のない声で答えた。佐吉の長男の豊田喜一郎で、明治二十七年の生まれだから、このとき三十七歳であつた。

「そうか」

と、誘ひかけた男は、あつさりうなずいた。というよりも、こんなことをしている時の喜一郎には、誰が何を言おうと耳にもはいらぬのを知っているのだから、相手にするのを諦めたという方が当たっているだろう。喜一郎の異母妹である愛子の婿養子で、自動織機製作所の社長などとしてゐる豊田利三郎であつた。喜一郎より十歳の年上で、明治十七年生まれ、四十七歳であつた。

「おいっ、愛子、幸吉郎ッ、帰るぞ！」

と、利三郎は振り向いて、奥座敷に向かって大声で怒鳴つた。

すぐに奥の客間から、黒の式服を地味な普段着に着かえ

た愛子が、小学校六年生になる長男の幸吉郎と並んで出て来た。その後ろから、これはまだ式服のままの喜一郎の妻の二十子^{ふたご}が、二人を見送って現われた。

「お兄さま、ではお先に——」

先ほど利三郎が入って来た時に、襖は明けたままであった。その敷居の向う側に行儀よく坐って、愛子は指をついて挨拶した。

愛子が姿を見せると、いまにも降り出しそうで薄暗かった座敷が、ぱっと明るくなったように喜一郎には思われた。喜一郎からは五つ年下の愛子は、三十を越えたばかりであった。やや小柄だが、頬のふっくらした美貌であった。きめの細かい肌の白さが光り輝くようだと、いつも喜一郎の目には見えていた。

十年ほど前の大正十年の秋に、大学を出て間もない喜一郎は新婚早々の利三郎、愛子夫妻とアメリカ、ヨーロッパを巡遊したことがあったが、その頃の愛子はまだ少女そのままのほっそりした身体つきで、大柄な外人女性たちのあいだにまじって、ひどく可憐であった。

その頃の思い出も、また、いま三十代に入って、ふつくと女らしさが加わり、落着きと淑やかさを備えてきた愛子も、どちらも喜一郎にとっては、ひそかな自慢であった。愛子の後ろに慎み深く控えている二十子は、愛子よりも

さらに二歳の年下であった。少しおでこが出ており、頬の骨も出っぱり気味で、愛子に比べると美人とは言い難かったが、爽かに澄んだ瞳が、邪気のない、童女のように素直な彼女の性格を示していた。京都の旧家である飯田高島屋の六男三女の末娘に生まれて、植込みだけでも三千坪はあるといった邸内でおっとり育てただけに、心がゆつたりと広く、人の悪意は彼女の皮膚から中へは染み込まず、善意のみが染み通るといった、たぐいの少ない人柄といわれていた。

だが、歯車に噛み合わせてまた次の歯車をと、何かの機械のラフな鉛筆書きの設計に熱中している喜一郎には、美しい妹の姿も明るい妻の瞳も、ほんの一瞬の関心でしかなかった。

「うん——」

それだけが答えて、すぐにまたスケッチに目を戻してしまった。せっかちな利三郎はもう靴をはいて、表の庭に出て、「運転手、運転手ッ」と叫んでいる。

愛子は微笑して、その両方にかわるがわる目をやっている。短気で我がままで、威厳をつくるのが好きなのは夫の利三郎の日常だったし、一方、兄の喜一郎といえど、もともと寡黙な性質だったのが、最近きわだって雑談というものをしなくなっている。その代わり、技術めいた話なら、

一時間でも二時間でも、玄関であろうが茶の間であろうが、時と所に頓着なく話し込むし、また、思いつけばトイレの紙にまで設計めいた絵を描き始め、アイディアは寸刻を置かずに手紙にして、部下の技師に送るのが兄の毎日になっている。父の分骨法要の帰省先だからといって、それを差し控えるような喜一郎ではないのだった。

「では、ごゆっくり——」

愛子は言つて、兄の前を立つた。この家は、大きいけれど殊更めいた玄関などはなく、入口の引戸をあけると裏庭まで通り抜けの広い土間であつた。土間の右側は手前が納戸、奥が勝手場で、左側は、入口のすぐが愛子たちのいる八畳の間、続いて喜一郎のいる十畳の間と、二つの部屋が並んでいる。家は左右に細長い矩形で、客間や仏間や居間などは、それから左に続いている。愛子は八畳の間からすぐ土間に下りた。

革草履をはいて前庭を通り過ぎ、門まで行つて見ると、夫の利三郎の前で随行して来た豊田自動織機の若い社員が、蒼くなつてべこべこ頭を下げていた。

「どうなさつたのですか？」

夫を見上げて、愛子は目を細くしてたずねた。

「ハイヤーの運転手め、どこへ行きよつたんや。社長の俺がお帰りになるというのに、控えとらんとは不埒至極な奴

や！」

「あら。お帰りの予定時間は、まだずつとあとでしたわ。あなたが余りお急ぎになるから……」

「あほうッ！」

癪癖の強い利三郎は、細い端正な顔の高い額に青筋を立てて、名古屋に婿に来てから十年経つても一向に直らぬ関西弁で、金縁眼鏡を光らせて怒鳴つた。

「すぐ呼んで参ります。ほんのそのうどん屋だと思ひますので……」

若い社員はおろおろして、二人に何度もお辞儀すると、背中を丸くして当てずっぽうに走つて行つた。

「運転手が戻つたらすぐ知らせるんやぞ。その間に、喜一郎に話がある」

利三郎は愛子に言ふと、そのころはまだ珍しかったゴルフで鍛えた確かな足どりで大股に庭を突っ切つて、も一度部屋に取つて返した。

「何を描いとるんや、いったい。今度は何をこしらえるちゆうんや」

喜一郎のテーブルの真向いにどっかり坐り込むと、利三郎はいきなり、きびしい調子で切り出した。

「この前はエンジンを作つとつたが……鋳物工場の一と隅にえらい秘密めかしい板囲いをして、その中でお前はまし

やかの山をこしらえて、一年もかかって一人でエンジンを作ったようやが……あのエンジンは動いてるのか？」

「動いてるよ。おもちゃだからなあ。動いてくれんと困る」
「そうは言わさんぞ」

喜一郎のはぐらかすような答えに、利三郎は「そう痛が立ちつるようであつた。」

「お前は——自動車を製造すると言うとるそうやないか。それは本当か？」

思ひきつたように、利三郎はたずねた。そのことについて、利三郎が喜一郎に直接に発言したのは、この時が最初であつた。

「知らん。そんなことは言わん」

「それなら——その図面は何や？」

利三郎は、目の前で喜一郎が描いている鉛筆書きのラフ・スケッチを指さした。先ほどの歯車ではなくて、今度は別の紙に、四角や卵型のひしやげたのやらと、何か箱のようなものが三つ四つ描かれている。

名古屋から二十子のお供で来ている若い女中が二人にお茶を運んで来たが、利三郎の一と睨みに震え上つて、慌ててテーブルに置いて立ち去つた。

「何になるかなあ。とにかく、まだおもちゃだよ」

落書を母親に見つかった少年のように、はじめて喜一郎

は利三郎の方に正面から顔を向けて、黒いセルロイド縁の大きなまん丸い眼鏡の奥の目に微笑を見せた。やや猪首で、顔の肉付きが厚く、とても好男子とはいえないが、歯並びが綺麗で、笑うとひどく人なつっこい顔になる。

「なあ、喜一郎。大事なことから、とぼけんといってくれよ。お前は一年がかりで、スミス・モーターとかいう、四馬力とかの小さなガソリン・エンジンを一人で作つとつた。それからこのごろは、オートバイとかバイクモーターとかを作るとか言うて、東京や大阪や神戸の方々の工場で、調査して回つてゐるそうやないか。それに、そのスケッチや。それは自動車のボディの型やろ。そうに違ひない。——そのうえ、お前が自動車をつくりたい言うところという噂まで聞くと、俺にはそれは道楽や研究で一台や二台作るのではのうて、事業として自動車製造にかかりたいと言うところうに聞こえて、心配でならんのや」

喜一郎は、答えない。まるで利三郎の言葉など、彼の独り言ごごと聞き流すかのように、黙つてテーブルに屈み込んで鉛筆を動かしている。

「なあ、喜一郎——」

と利三郎は、ややしんみりした声になつた。

「もちろん豊田家の事業は、全部義父おやじの発明が基礎になつておる。貧乏も困難も物とせぜずに苦心慘澹して、動力織

機や自動織機を發明してくれたのが、今日の豊田家と豊田系会社全体の繁栄の基礎になっておる。俺はそれに心から感謝しとる。それは誰にも劣らんつもりや。しかし、俺の立場は感謝するだけでは済まんのだ。俺にはその事業をしっかり守り、一そう發展させて行かんらん義務があるんや」

その義務は、重いのだと、利三郎は自分自身に言い聞かせるように頷きながら言った。

利三郎の言葉には、俺が豊田家の家長で、俺には豊田系の全会社の興廢についての全責任があり、また、義弟であるお前を監督し、大成させていかねばならぬ義務もあるのだ——といった意味が含まれていた。

今日の常識からいえば、喜一郎は故佐吉の長男で、利三郎はその妹愛子の夫である。喜一郎が豊田家の当主であつて、利三郎は単にその妹婿に過ぎない。けれども当時の家族主義の民法では、同一戸籍内にある者は「年長者をもつて兄とする」という意味のことが定められていた。従つて、婿養子として入籍した以上は、喜一郎よりは十歳も年上の利三郎の方が「兄」であつた。父佐吉の亡いあとは、すなわち『家長』であつた。

利三郎は婿養子としての立場から、その家長としてのあり方を自分では責任、義務といった側面から捉えていると

信じており、そしていまもその視点から発言しているにしても、それでもなお彼の激しい気性と貴族的な性格からして、聞く者には『權威』や『權利』の主張と印象されるのは、やむを得ないことであつた。いや、彼自身の内部においても、責任感と權利意識とは表裏一体のものとして渾然としていたと理解するのが妥当だっただろう。

喜一郎には、当然ひそかな反発が潜在していた。

「俺は、いつも思うとる。その發明王と謳^{うた}われた義父^{おや}の長男でひとり息子でもあるお前が、同じ發明に耽^{かか}るのを、俺は止める權利はないと。むしろ俺は、お前を激勵して、お前の研究や發明を完成させてやらねばならぬ義務があると自覺しとる」

利三郎は、また自分の言葉に頷いてから続けた。

「そやけど、物には程度がある。ほかの發明や事業ならともかく、自動車といえは容易ならん問題やぞ」

喜一郎は、なおも答えなかつた。そのままボディらしいもののスケッチを続けていたが、暫くして一区切りついたところで顔を上げて、

「そんなことはない。そんなことは言わんぞ」

口の中でぼそぼそ小声で言った。が、心の中では、誰が告げ口したのだろうと、舌打ちしていた。

利三郎に対しては曖昧に否定したものの、自動車工業への進出は喜一郎のここ数年來の宿願で、利三郎の指摘は図星であった。

父の佐吉が、晩年には自動車製造の夢を何度か口にしていた。それが全く茶話程度のものに過ぎなかったにしても、喜一郎は喜一郎で、父とは別個に大学時代から自動車に興味を抱いていた。愛子夫妻と外遊した時には、アメリカやヨーロッパで沢山の自動車を見て一そう関心を深めた。そして二年前の昭和四年の秋に、マンチェスターのプラット・ブラザースから佐吉の自動織機のパテントの譲渡を請われて、その契約のために訪英した時には、すでにイギリスでは自動車は大衆の足というに近かった。喜一郎は、パテント関係の仕事は同行の三井物産と豊田自動織機の社員たちに任せて、自動車工場ばかり見て歩いた。

プラットとの商売に氣をよくした利三郎は、さらに喜一郎に対して、アメリカにも売って来いと命令した。

「アメリカには、うちに匹敵する優秀なのがあるよ。とても売れないよ」

「いや、売れる。必ず売れる。行って売って来い」

利三郎があくまで言い張るので、喜一郎は売れないのを承知で渡米した。今度は商談は同行の三井物産の古市勉というベテラン社員に任せきりにして、自分は見向きもしな

かった。自動車とその部品関係の工場ばかり見学して過ごしたが、アメリカではもはや、自動車は大衆の足そのものであった。

（日本には、自動車工業というものは、今もなおゼロなのだ。明治の末や大正時代には、ごく一部の特権階級の、むしろ装飾的な贅沢品に過ぎなかった自動車だが、大正十二年の関東大震災で汽車や電車が潰滅した時にやっと実用的な価値が認められて、それからはぼつぼつ国産も始まっている。けれども、それらは原始的な手工業同然のもので、年産にしても百台かそこいらに過ぎない。それはアメリカやヨーロッパでの、コンベア・システムによる流れ作業とは比較にも何にもならない幼稚で貧弱なものなのだ。欧米では年産何十万あるいは百万をこえる大量の自動車が流れ出ており、そして極めて裾野の広い部品工業がこんなに発達しているというのに！）

喜一郎は、それらの工場を視察するたびに感歎した。第一次世界大戦でドイツが倒れて以来、日本は世界の五大強国などと空威張りしているけれど、自動車工業一つを例にとっても、とても欧米先進国の足元にも寄れないのであった。

（その広汎な部品工業の広がりからいって、日本が近代的な工業国家に脱皮するためには、どうしても本格的な自動

車工業が要る。それがなくては、民族産業全体の確立が成り立ち得ないのだ。それなのに、国内市場の殆ど一〇〇パーセントを欧米車に占領されている現状は、どんなことをしてでも打破しなければならぬ！

喜一郎は深い感慨をもって思ったのであった。——関東大震災以来発達してきたバスや円タクにしても、使用車は全部が欧米からの輸入車といえた。そして日本の急激な自動車化に目をつけたアメリカの巨大な自動車資本は、単に完成車の輸出だけでなく、長い将来にわたる日本市場の完全独占支配をめざして、すでに『アメリカの自動車工業』そのものを日本に進駐させていた。

——まずフォードが、大正十三年の十二月に、横浜市子安海岸の横浜ドックの倉庫を借りて仮工場を作った。翌年二月には、資本金四百万円の日本フォード自動車株式会社を設立し、アメリカ本国から一切の機械設備を運んで工場を完成し、いわゆる『ノックダウン方式』によって日本でフォード車の製作を始めた。ノックダウン方式とは、いうまでもなく一切の部品を本国から搬入して、現地の労働力によって組立てる方式で、完成品を輸出するよりは嵩ばらないだけに運賃が安く、また部品は完成品より関税が安く、そのうえ現地の労賃は本国よりもずっと安いので、完成品の輸出方式よりは利益が遙かに大きいのである。そし

てその大きな利益は、むろんごっそりとアメリカ資本のものになってしまふ。

フォードはさらに、昭和二年には横浜の神奈川区守屋町に四、二二二坪の組立て専用工場を建設して、年産七千台から八千台に及ぶ乗用車とトラックの製作を続けた。有名なT型フォード車で、すでにコンベア・システムの近代工場であった。さらに昭和四年暮には、将来の飛躍に備えて資本金も八百万円に倍額増資している。

これに対して、アメリカ自動車工業界のいま一方の旗頭であるゼネラル・モーターズ(GM)は、フォードよりは二年遅れて、大正十五年の年末近くに大阪に拠点を置き、大正区鶴町の東洋棉花の紡績工場と倉庫を借りて四、七四八坪の工場を建設した。翌昭和二年一月には資本金八百万円の日本ゼネラル・モーターズ株式会社が設立され、その四月から、フォードと同じノックダウン方式によるGM車の製作と販売が始められた。車種はシボレーの乗用車とトラックが主体で、ほかにオールズモビル、ポンテアック、オークランド、ビュイックなどがあり、これらを合わせて年産約一万台であった。

こうして、日本の道路という道路が、すべてアメリカ車によって占領されていた。帰国してそんな実情を見れば見るほど、喜一郎には我慢のならない思いがつのつた。

（人間の衣服を織るための織機も、明治の末期までは動力に頼るものは殆どすべて舶来品であった。それが佐吉の苦心の改良と発明で、いまでは国産品に切りかわったばかりでなく、各国への輸出さえ盛んである。自動車工業が紡織機とは比較にならぬほどの複雑な工業であるにしても、やればやれぬはずがない）

喜一郎は、秘かに思うのであった。

（織機がそうであったように、いつの日にかはフォードやGMを日本市場から駆逐して、日本の道路という道路を、日本の車で——俺の、トヨタの車で満たしてやる！）

秘かではあるが熱く燃え上る喜一郎の願いだった。しかしまだ、社内といえども他人に言えるような段階ではなかった。

なぜかなら、喜一郎は自分自身が『技術者』なのであった。利三郎が神戸高商から東京高商専攻科出身の『経営者』であるのに対して、喜一郎は二高から東京帝大工学部機械工学科の出身である。すでに十年余り父を助けて、父の名で知られる自動織機にしても、実際は喜一郎の手で完成している。

豊田自動織機製作所では、義兄の利三郎が社長であり、副社長や専務はいなくて、喜一郎が一人きりの常務であった。それは佐吉の死によってそうなったのではなく、大正

十五年十一月の、同社創立の時から一貫してそうなのであった。佐吉は、豊田系事業の総本拠である豊田紡織などの社長をしているのと、日華の親善提携を生涯の仕事と考えて、すでに数年前から上海に居を構え、骨を大陸に埋める覚悟で上海豊田紡の経営に当たっているのと、いま一つは彼自身の発明による織機に頼って創設されながら、複雑な事情があつて涙を吞んで退かされた『豊田式織機』という会社との法廷闘争にまで及んでいる面倒ないきさつもあつて、自動織機製作所では、利三郎の実兄で、若くして三井物産の重役となり、また自らのイニシアティブで創設した東洋棉花の初代の会長兼専務となっている児玉一造とともに、相談役という一歩退いた立場にいたのであった。

もしも喜一郎が利三郎と同じように経済学部か法学部でも出た普通の常務だったら、腹心の技術幹部に対して、「自動車をやりたい。研究せよ」と秘かに命じさえすればよかった。しかし喜一郎は、常務であると同時に誇り高きエンジニアであつて、技術については誰よりも通曉していることが、自分に課せられた任務であると信じていた。僅か四馬力のちっぽけなスミス・モーターも、そのために自力で製作してみたものであった。自動車の心臓はエンジンであつて、エンジンに確信を持つことなしに自動車の製作は考えられないからであつた。

(俺は——自動車をつくるなどとは、まだとても利三郎に言う自信はない。それをいったい、誰が告げ口したのだらう?)

喜一郎は考え続けた。誰にも話さなかったとはいっても、自動織機製作所の製造担当取締役である大島理三郎には、「万一実現の時には」とさりげなく話しておいた。また、豊田紡織の支配人である岡本藤次郎には、いよいよという段階での資金の問題があるので、かなりはつきり意中を打ち明けてある。しかし、大島は少年時代から佐吉の終生の愛顧を受けた人間だし、岡本は、豊田家に婿入りした利三郎の相談相手といったかたちで、その実兄の児玉一造によつて三井—東洋棉花系から送られて来た人物ではあるが、晩年の佐吉には信頼された大番頭であった。温厚で誠実で公正で、二人とも、喜一郎の内部においてさえまだ十分には煮えも固まりもしていないアイディアなどについて、先回りして利三郎に告げ口するような思慮の浅いことは決してしない。

(ははア、お豆たちがしゃべったのだな)

喜一郎は気づいて、利三郎の顔を見てにやりと笑った。「何がおかしいのだ?」

「いや。あまり癪を立てると、佐吉のように血圧が上がるか

らなあ」

「あほう!」

肩すかしを食ったようで、利三郎は苦笑した。——お豆というのは舞子よりもまだ年下の、小学校に通いながら夜は宴席の手伝いに出ている、芸妓の見習いのそのまた見習いといった少女たちである。当時は名古屋財界でも社交場は花柳界で、宴会は一流料亭で持たれても、二次会は待合が主であった。大事な取引はむしろ待合でのくだけた歓談の中で決められることが多かった。豊田家では待合は佐吉以来袋町の『弥生』が本拠で、女将で家つき娘の鈴木すずは、佐吉に頼まれて喜一郎の社交上の後見人であり、また『お乳母さん』でもあった。

すずは『おすう』と愛称され、喜一郎よりは何歳か年上で、小柄で細面ほなもとのきりりとした美人であった。伶俐で、盛装すれば器量自慢の名古屋芸者の誰でもが一目置くほどの美しさなのだが、引立て役である自分の立場を心得て、いつも地味につくろっていた。

その弥生へ喜一郎は二週間ほど前に一人でぶらりと現われたのだが、おすうは玄關で「はい」と言って、何時もの通り大判のノート一冊と二、三本の鉛筆を差出した。そして舞子とお豆ばかり十人ほどを、喜一郎の座敷に行かせた。いつも大抵、そうなのだった。喜一郎とて生身なまみの人間だ

し、また自動織機の開発で、中京地方ではときめいている豊田財閥の御曹司であった。金に不自由のあるわけがなく、若い魅力的な芸者と遊ばないわけもなかった。

けれども、精神活動の殆どを機械の考案に奪われているような喜一郎には、お世辞一つ言うつもりがなく、自分から特定の芸者に熱中するようなこともなかった。同様に、芸者たちからも、好いた惚れたの煩わしさは殆ど持ちかけられなかった。無口と不愛想の内側で、喜一郎には心の温かさがあつたから、内心では惚れた女もいたかも知れないが、喜一郎に対してはそのようなことを持ちかけるのが憚られた。

こうして喜一郎は、弥生にやって来ても無邪気なお豆や、せいぜい舞子たちに囲まれて、がやがや勝手に、彼女たちを遊ばせておくことが多かった。そして事実、彼自身もそれを樂しがっていた。例によって無駄話などすることもなく、自分はテーブルにもたれて、おすうが渡してくれたノートに歯車やらボディやらと、思いつくままに考案をスケッチするのである。

その夜もそうであった。父の佐吉は酒と煙草がこの上もなく好きで、結局はそのために血圧を高くして脳溢血で倒れたのだが、喜一郎は飲めば父に劣らず強いけれど、酒は特別に好きというほどではなかった。喜一郎がスケッチを

続けているのを見て、お豆の一人が寄つて来た。

「喜いさま、何書いていりゃすの。汽車ポッポばかり書かんと、わしらと遊んでちょう」

「汽車ポッポじゃない。これは、自動車のボディというものだ」

「うわあ、自動車ッ。——喜いさまの会社で、自動車こしらやすの？」

「うん、こしらえる」

「うわあ、ええなも。わしらも乗せてちょう」

「うん、乗せてやる」

「一台？ 二台？」

自動車と聞いて、みんなの目が好奇に輝いて喜一郎に集まった。

「いいや、一台や二台じゃない。何千台も何万台も、何十万台もこしらえる。日本の道路をトヨタの車で一杯にするんだ」

「うわあ、ええなも！」

「喜いさま、しつかり！」

舞子やお豆たちは手を叩いて歓声を上げたのだが、あの時の自分のうわっ調子が弊ったのに違いない。弥生に現われた利三郎の耳に、どの舞子の口からか、喜一郎の放言がはいらぬわけがないのだった。

「なあ、喜一郎」

利三郎の声が和らいだ。

「俺と違って、お前は東大出の優秀な技術者や。世間的には義父の業績ということになつて自動織機にしても、義父の発想をもとにして実際に完成させたのはすべてお前の手柄や。——昔は神さまのように思つた世界第一のマンチェスターの会社から、そのパテントを買いに来た。これまで日本は欧米のパテントを拝み奉つて買うばかりで、日本のパテントが欧米の一流会社に買われた例はなかった。義父も俺も、日本の誇りやと思つて、胸を張つてそのパテントを譲ることに同意したんや。——義父はそれがお前の業績であることを誰よりもはつきり知つたから、そのパテント料の百万円を、お前が何の研究に使うてもええと許したんや」

昭和初年の百万円といへば、仮りに貨幣価値を千倍としても現在の金では十億円、五千倍なら五十億円にも当たろうか。利三郎は言葉を切つて、先ほど若い女中が置いていたお茶を飲んだ。長い問答で、お茶はすっかり冷えていた。

「俺も義父の通りに思うとる。百万円といへば大金や。うちの会社の全資本金と同額やが、お前の自由な研究に使う

てもらおうと決めておる。しかし喜一郎、自動車だけは、やめてくれんか。もちろん道楽で自動車にのるのはかまわん。義父が蓄電池の発明に百万円寄付したように、学問的な研究で自動車に百万円つぎ込んでしもうても少しも構わん。——しかし事業として自動車の量産に乘出すことは……それが余りにも複雑で大規模で、現在の日本の工業力ではとても不可能だというて……三井三菱でさえ怖ろがつて、逃げておる。現に東京でも、幾つもの会社が自動車で潰れた。豊田なんか、いくら名古屋では財閥だと威張つてみたところで、三井三菱に比べたら吹けば飛ぶような小財閥やないか。自動車の製造なんかに乗り出したら、あっという間にべしやんこになつてしまふぞ」

（吹けば飛ぶような豊田だからこそ、それが決意出来るんだ！）

喜一郎は反射的に思ったが、言葉にはしなかった。第一に喜一郎は、言葉での論争などは全く無駄なものだと信じている。利三郎に対しても誰に対しても、言葉などで争おうという気持は全くなかった。やりたい仕事は、黙つて『実際に』やるだけのことである。

第二には自動車の仕事も、別に利三郎にひた隠しにして進めるつもりではなかった。いずれは相談し、同意させるつもりだが、それには十分な根拠が要った。そしていった